

# 2018 年度母語継承語バイリンガル教育(MHB)研究大会 新時代のマルチリンガル教育を考える -バイモーダルろう教育からの示唆-

## 事前学習用資料

すでにお知らせしていますように、2018年度のMHB研究大会では、「新時代のマルチリンガル教育を考える-バイモーダルろう教育からの示唆-」というテーマを掲げ、バイリンガル教育としてのろう教育を中心に据えています。学会員の皆様の中には「ろう教育とバイリンガル教育はどのようなつながりがあるのか？」という疑問をお持ちの方の少なくないかもしれません。そのため、「なんだかよくわからないから今年は参加しないことにしようかな・・・」とお考えの方もいらっしゃるかもしれません。

しかし、ろう教育研究はバイリンガル研究全体に非常に大きくかかわりを持ち、バイリンガルろう教育について学ぶことは継承語教育・バイリンガル教育研究に携わるすべての学会員の皆様にとって極めて有用であると思います。みなさまの本大会へのご参加を促すきっかけになればと思い、ここで、少し補足説明を試み、あわせて2017年10月20日(金)に行われた読書会で読まれた文献について簡単にご紹介したいと思います。

### 1) 日本手話は日本語とは異なる文法体系を持つ言語である

この項に関しては、特定の文献によるというよりは、日本手話に関する基礎の基礎にあたる知識を2018年度MHB研究大会実行委員の方でまとめたものです。

昨今「手話も言語である」という社会的認識が高まりつつあり、2018年4月13日現在、178の自治体で「手話条例」が制定されています(日本ろうあ連盟HPより)。しかし、日本で用いられている「日本手話」と「日本語対应手話」の違いについてはまだあまり認識が深まっているとは言えないかもしれません。「日本手話」は聴覚に障害を持つろう者を中心に自然言語として発達したものであり、言語としての体系性を備えたもので、ジェスチャーやマイムとは異なります。「手話でどこまでコミュニケーションがとれるの?複雑なことも全部伝えられるの?」と聞くことは「日本語で言えることは全部英語で言えるの?」と聞くことと同じくらいバカげた質問であるといえます。

これに対して、「日本語対应手話」(「手指日本語(しゅしにほんご)」「シムコム」[SimCom, simultaneous communicationの略]「手話付きスピーチ」と呼ばれることもある)とは、音声言語としての日本語を手と指を用いて表現したもので、語順・文法は音声日本語のものを借りています。日本手話では視線の移動やまゆ・あごの動き、手の動きなど様々な要素を駆使して複層的に表現するためとても効率よく意味を伝達するものを日本語対应手話では音声言語そのままの一つ一つ語彙を表出するので、極めて非効率的な表

現になるようです。伝わりにくいだけでなく、意味の誤解を生むこともあります。平成29年（2017年）に日本学術会議が行った提言「音声言語及び手話言語の多様性の保存・活用とそのための環境整備」では日本手話と日本語対応手話を以下のように説明しています。

日本では、自然言語として生まれた「日本手話」と、日本語の語順にしたがって手話の語の一部を並べた「手指日本語（しゅしにほんご）」（「日本語対応手話」、「シムコム」[SimCom, simultaneous communicationの略]と呼ばれることもある）が主に使用されている。このうち日本手話は音声言語の日本語とは全く異なる言語であって、子どもが最初に獲得する言語であり、聴覚に障害のある人にとっての第一義的な存在である。一般の人には、手話はジェスチャーやマイムと誤解されることが多く、言語としての認識度が低いという現状がある。音声言語の代替手段であるとか、人工的に発明できるとか、世界共通の手話が存在するなど誤解されることがいまだに多いが、日本手話は、代名詞などの体系的な語彙構造や接続詞、時制（テンス）などの文法機能を担う語を持つなど、言語としての体系性を十全に備えている。また、NMM（非手指標識）といって、手話の文法を担う手指以外の動作（視線の移動や顎引きなど）を持っている。（中略）一方、日本語を話しながら手話単語を並べる手指日本語は、音声言語としての日本語を手と指で表現したものであって、語順や文法は音声日本語に依拠している。その点で、手指日本語は「音声日本語」の一種であって、「手話言語」ではない。

（日本学術会議, 2017, pp. 1-2）

こうした自然言語としての手話と、現地でマジョリティ言語として用いられる音声言語に手指をつけた「手話」との混在は、日本だけに見られるものではなく世界中で見られるものです。自然言語としての手話はその地域のろう者が作り出していったものであるため、アメリカ・イギリス・オーストラリアで話されている音声言語が英語であるからといってアメリカ手話とイギリス手話とオーストラリア手話（オースラン）が共通しているということにならず、これらの手話はまったく違う言語なのです。（しかし、日本で「日本語対応手話」があるように、これらの国でも音声言語である英語に手指を付けたMCE(Manually Coded English)というものはあります。)

## 2) ろう児が読み書きを習得するにあたっては手話言語とは異なる音声言語（の書記化したもの）を習得する必要がある

10月の読書会で読んだ文献のうち、この項に関するもの（本文で紹介する順）

**Strong, M., & Prinz, P. M. (1997).** A study of the relationship between American Sign Language and English literacy. *The Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 2(1), 37-46. (Google scholar で PDF 入手可)

**Tang, G., Lam, S., & Yiu, C. (2014).** Language development of Deaf children in a sign bilingual and co-enrollment environment. In M. Marschark, G. Tang, & H. Knoors (Eds.), *Bilingualism and bilingual Deaf education* (pp. 313-341). Oxford: OUP. (Google scholar で PDF 入手可)

**Knoors, H., & Marschark, M. (2012).** Language planning for the 21st century: Revisiting bilingual language policy for Deaf children. *The Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 17(3), 291-305. (Google scholar で PDF 入手可)

さて、前項で手話言語（日本の文脈で言うと日本手話、以下同様）が音声言語（日本語）やそれを手指で表現したもの（日本語対応手話）とは全く異なる固有の言語であることを見たわけですが、ここにろう教育をバイリンガル教育としてとらえる意義が生まれます。

MHBの学会員である皆様は海外における継承日本語学習者の指導や、日本におけるニューカマーの指導、インターナショナルスクールなどにおける英語を教授言語とする指導など、様々なコンテキストにおけるバイリンガル教育に携わっていることが多いことと思います。バイリンガル児童生徒のL2発達における母語の重要性については、改めて指摘するまでもなく、様々なコンテキストにおけるバイリンガル教育に携わる方たちに共有されていることでしょう。バイリンガル研究の第一人者であるカミンズはこの考え方を「二言語相互依存仮説」として以下のように定式化し、これはバイリンガル教育研究の大きな礎となってきました。

学校や周囲の環境の中で言語（X）に接触する機会が十分にあり、またその言語（X）を学習する動機付けが十分である場合、児童・生徒が別の言語（Y）を媒体として授業を受けて伸びた言語（Y）の力は言語（X）に移行（transfer）し得る。

（中島訳：中島，1998，p.40）

この考え方にたてば、ろう児の言語発達・リテラシー発達の土台として、手話による教育が重要であると考えられます。160名のろう児を対象に、アメリカ手話（ASL）の能力と英語におけるリテラシーの関係を検証したStrong and Prinz（1997）の論文は、まさにカミンズが提唱した二言語相互依存仮説が、音声言語のバイリンガリズムのみならずモダリティを超えて手話言語と音声言語のバイリンガルにおいても成立することを示すものです。彼らの検証では、160名のろう児をASLの能力別に3つのグループに分けたところ、もっともASLのレベルが高いグループ二つは、一番低いグループに比べ、英語のリテラシーレベルが統計的に有意なレベルで高いことが報告されています。この結果は、年齢やIQのレベルを統制した上でのものであったため、ASLの運用能力と英語のリテラシーの直接的な関係を示しているといえるでしょう。Strong and Prinz（1997）は「この研究から得られる示唆は明白でありかつ力強いものである：たとえ中程度レベルのASLであったとしてもASLの運用能力が高いことはろう児の英語習得に貢献する」明言しています。

音声バイリンガルの児童・生徒の教育において「L1の保持・発達を促すことはL2発達のために必要な接触を減らすことであるから、なるべくL1を使わない方がよい」という言説があるのと同様、ろう児の教育においても「音声言語・残存聴力活用の妨げになるので、『安易に』手話を使わせてはいけない」とする言説は根強く残っています。この、一見説得力がある、しかし実証的な根拠に基づかない主張に対し、バイリンガル研究の立場から私たちは明確な根拠を提示してL1を積極的に活用することでL2の発達をさらに深めることができることを示していく必要があります。これは、音声言語のバイリンガリズムと、手話と音声言語二つのモダリティにおけるバイリンガリズム両方に共通する点です。

これまでのMHBとしての学びに関連して言うと、2015年に大きく取り上げたトランス・ランゲージングや、2016年の大会で注目した超多様性（Super-diversity）など多くのコンセプトは直接バイリンガルろう教育にも当てはまるものです。日本手話・指文字・書記日本

語（バイモーダルろう教育の場合はさらに音声日本語）などの様々な言語・記号体系を駆使した授業は、極めて高度なトランス・ランゲージング実践の場として捉えることができます。こうした様々な言語資源を柔軟に使用した実践を報告したTang, Lam, and Yiu (2014)の論文は、今年度の基調講演の内容との関連も深く、多くの示唆に富むものです。

また、特に継承語教育やニューカマーの教育に携わっている学会員の皆様にはなじみ深いであろう超多様性の概念は、ろう教育の現場にも非常に親和性の高いものです。現地語と継承語の運用能力や、家庭における使用頻度など様々な要因が複雑に絡み合う中で言語習得をしていく音声バイリンガル同様、ろうバイリンガルも残存聴力や手話言語と出会った時期、手話言語へのアクセス頻度や補聴器・人工内耳の装着の有無などの要因が複雑に影響し合う中で言語習得を行っています（Knors & Marschark, 2012）。このように、バイリンガルろう教育は音声バイリンガルの教育と重なり合う部分が非常に多く、それぞれの研究から学ぶべき点はきわめて多いと考えられるのです。

### 3) ろう児の言語発達における手話の重要性は、一般的な音声バイリンガル児童の母語の重要性よりもさらに際立っている

10月の読書会で読んだ文献のうち、この項に関するもの

**Yoshinaga-Itano, C. (2013).** Principles and guidelines for early intervention after confirmation that a child is deaf or hard of hearing. *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 19(2), 143-175. (Google scholar で PDF 入手可)

ろう児の言語発達においては、生まれた時または幼少時に親の都合などで第二言語環境に入った一般的な音声バイリンガル児童の言語発達と大きく異なる点もあります。

一点目は、90%以上のろう児が聴の親の元に生まれるため、ろう児の多くにとって手話環境があるかないかは第一言語習得の度合いに大きく影響を与えるという点です。第一言語は、子どもの認知発達のツールとしてきわめて重要な働きをもっています。このツールを持っているか否かという点が、のちの学習上到達度に大きく影響を与えます。だからこそ、Yoshinaga-Itano(2013)で紹介されるような、聴覚障害の早期特定後の支援が大きな意味を持つのです。ここに、ろう教育特有の難しさが出てきます。音声バイリンガル児童の教育においては、その母語保持・発達を支援するために親たちに自分の母語に誇りを持ち、その重要性を認識してもらうところから始まります。しかし、手話に全く接したことのないろう児の親たちにとっては、ろう児にとってアクセス可能な言語がふんだんにある環境を整備するためには自らが第二言語として手話を習得しそのうえで子育てをしていかなければならないという、極めて大きな壁にぶつかることとなります。そのため、ろう児の言語発達を支える取り組みにおいては、聴の親・家族に対する手話習得の支援が重要になってくる、というのがろうバイリンガル教育の特徴のひとつです。

ただし、周りの社会であまり使われていない子どもの母語・第一言語を発達させていく

ためには、親同士の連携や、ネイティブスピーカーの活用が重要になるという点については、ろう教育と継承語教育に共通する部分といえるでしょう。一つの家庭のみで使用される語彙には限りがありますから、読書や様々な体験的活動の中で言語を使用していくことが子どもの言語発達には欠かせません。

#### 4) ろうバイリンガルの言語習得研究は、リテラシー獲得における音韻意識の役割について多くの示唆を与える

10月の読書会で読んだ文献のうち、この項に関するもの

**Mayer, C., & Wells, G. (1996).** Can the linguistic interdependence theory support a bilingual-bicultural model of literacy education for deaf students? *The Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 1(2), 93-107. (Google scholar で PDF 入手可)

**Mayer, C., & Akamatsu, C. (1999).** Bilingual-bicultural models of literacy education for deaf students: considering the claims. *The Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 4(1), 1-8. (Google scholar で PDF 入手可)

**Mayberry, R. I., Del Giudice, A. A., & Lieberman, A. M. (2011).** Reading achievement in relation to phonological coding and awareness in Deaf readers: A meta-analysis. *The Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 16(2), 164-188. (Google scholar で PDF 入手可)

**Hermans, D., Knoors, H., Ormel, E., & Verhoeven, L. (2008).** The relationship between the reading and signing skills of Deaf children in bilingual education programs. *The Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 13(4), 518-530.

**Dammeyer, J. (2014).** Literacy skills among Deaf and hard of hearing students and students with cochlear implants in bilingual/bicultural education. *Deafness & Education International*, 16(2), 108-119.

ろう児の言語発達、とりわけリテラシーの獲得において、音声バイリンガル教育と大きく異なる点の二つ目は、リテラシー獲得の際に重要であるとされる音韻意識の活用にあります。聴児がそのリテラシー獲得で活用する音韻意識の発達は、聴覚障害をもつろう児では当然ながら制限を受けることとなります。この点から、前出のカミンズ理論をろうバイリンガリズムにそのまま応用することについて強固に反対するのがMayer and Wells (1996)、Mayer and Akamatsu (1999)の論文です。彼らは、そもそも手話言語には書記体系がないためにL2のリテラシー獲得の下支えとなるべきL1でのリテラシー発達が不可能であると指摘し、さらにL2での話し言葉に習熟することなしにL2でのリテラシーを獲得しなければならないという点が音声バイリンガルのL2リテラシー獲得とは根本的に異なると主張します。こうしたかれらの主張はその後のろうバイリンガリズム研究に様々な意味で大きな影響を与えました。しかし、Meyberry et al.(2011)のメタアナリシスでは、ろう

児のリーディング力の発達においては音韻意識の影響よりもむしろ一般的な言語能力の影響の方が大きいという結果が得られ、リテラシーの獲得における音韻意識のこれまでの理解が、音声言語に偏ったものである可能性を示唆しています。また、語彙習得の面からリテラシー発達を考察したHermans et al. (2008) では、オランダ手話を用いた指導が語彙発達に寄与してその結果リーディングのスキルに貢献することが報告されています。この研究は音声バイリンガルのリーディング研究で有名なVerhoevenも共著に加わったもので、バイリンガル児童のリテラシー発達に広く示唆を与えているといえるでしょう。デンマークのバイリンガル・バイカルチュラルアプローチで学ぶろう児331名を対象にしたリテラシースキルに関するDammeyer (2014)でも、研究参加者の約半数には聴児と比して1年以上のリテラシースキルの遅れは見られなかった、と報告され、バイリンガルアプローチの有効性が改めて指摘されています。この研究においては、補聴器や人工内耳の有無がリテラシースキルに影響を与えていないという指摘もなされており、音韻意識とリテラシーの関係について改めて考えさせられます。

このように、ろう児のリテラシー獲得について研究することは、これまでの音声バイリンガル児のリテラシー獲得に関する研究の視野をさらにひろげることにつながり、バイリンガル研究に関わる全ての人に大きな意味を持っているといえるのです。

\*\*\*\*\*

また、10月の読書会ではろうバイリンガルに関するここ15年の研究を網羅的にレビューしているものとして以下の文献を読みました。言語習得、言語使用、言語教育及び評価方法など、幅広い研究をカバーし、特にリテラシー獲得に関わる研究については多くのページを費やしており、情報量の高い論文です。

**Swanwick, R. (2016).** Deaf children's bimodal bilingualism and education. *Language Teaching*, 49(1), 1-34. (Google scholar で PDF 入手可)

以上、10月に行われた読書会で読まれた文献のご紹介を中心にして、ろうバイリンガル研究がバイリンガル研究全体に与える示唆について、また、ろうバイリンガル研究についての予備知識をまとめてみました。この小論が皆様の関心を高め、8月の大会の成功につながれば幸いです。

また、ろうバイリンガリズムについて、興味をお持ちになり入門書を読みたい、とお考えの方へのおすすめの本を下にご紹介します。8月の大会に合わせてお読みいただければ、と思います。

1. ジム・カミンズ 著 中島和子 訳著 『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版会
2. 佐々木倫子 編 『ろう者からみた「多文化共生」：もう一つの言語的マイノリティ』ココ出版
3. 全国ろう児をもつ親の会 編 『バイリンガルでろう児は育つ』生活書院

文責：MHB学会 2018年度大会実行委員長 佐野愛子